

〔目的〕乳児期の、特定人（多くの場合は母親）に対する特有の持続的な反応システムである attachment 行動は、乳児自身の外界（人的環境）に対する主体的な行動であり、社会性の発達の原初的な指標として極めて重要なものである。言語行動の発達とこの attachment 行動は深くかかわっていることは多くの研究が指摘するところであるが、本稿では、発達初期の attachment 行動がどのようにして言語行動の規定要因の一つとなってゆくのか、構造上の関連に焦点をあて、一事例の発達を追うことにより、実証的に考察を試みる。

〔方法〕N男の生後2年間の日常生活の行動観察記録を資料とする。（なお、ここで言語行動とは発声発語のみならず、発語以前の要求伝達様式、指示行為、身振り、理解言語も含む）

〔結果〕①生後6ヶ月頃から attachment 行動の中で役割交代遊び（「いはいはいばー」やリズムを伴う交互の遊び）が活発化する。それはその後もいろいろな形で表われ、他者と自己との交互性や他者の行動に対する応答性の増大をもたらし、他者と自己との2人の関係のセットの理解へと導く。②音声の模倣や身振りの模倣など attachment 行動を行なう中で獲得した行動パターンが、次第に分化して、他者に対する要求伝達時にも汎用されるようになる。③このように、0才後半期に最も活発である attachment 行動の時期と1才後半頃から活発となる表出言語の時期との間には、attachment 行動の遂行の中から communication set が準備され、行動パターンも attachment 行動の中で獲得した音声や身振りが汎化し洗練されて、前言語期を形成するに到ると考えられ、その期の伝達情報は格構造さ之も含むものであることが見い出せた。